

聖書：第二サムエル記4章1～12節

説教：ひとりの正しい人が

1 サウル家の人々

1) ヨナタンの弟イシュ・ボシェテ

サウルが戦争で倒れた後、イシュ・ボシェテが父の後を継いでイスラエルの王となります。この王を支えていたのがアブネルという將軍でした。ところが、あるとき彼は暗殺されてしまいます。後ろ盾を失ったイシュ・ボシェテは急速に求心力を失ってゆきます。そうなるといういろいろなことを考える者たちが出始めます。「イシュ・ボシェテについても先はない。この際、敵であるダビデに寝返った方が得策ではないのか。ダビデが喜ぶようなお土産を持っていけば、高い地位に取り立ててくれるにちがいない。」

バアナとレカブは、寝床で寝ていたイシュ・ボシェテを殺し、その首を持ってダビデの所に向かいます。ところがダビデはこのふたりを処刑するよう命じます。ダビデがなぜこのような判断をしたのか、その理由について考えていきます。

2) ヨナタンの子メフィボシェテ

ところで今日のところを読んでいて、「おやっ」と思わなかったでしょうか。4節です。名前が似ているので紛らわしいのですが、メフィボシェテという人が突然のように出てきて、また突然のようにバアナとレカブの話に戻ります。なんだか気まぐれな印象を持ってしまいます。こんなふうを書くには必ず理由があるはずです。

ヒントは4節の最初にあります。「サウルの子ヨナタンに、足の不自由な子がひとりい

た。」ヨナタンはサウルの長男です。かつてサウルの後を継いでイスラエルの王となることが約束されていた人です。ところがヨナタンは戦場で父サウルとともに死んでしまいます。生き残ったのは一番下の息子イシュ・ボシェテ。彼がイスラエルの王となります。ヨナタンから見れば末の弟にあたります。このヨナタンがこの箇所の大きな鍵となっています。そのことはまた後で触れていきます。

2 ダビデ

1) 厳しい処罰

登場人物のつながりが少し整理できたところで、ダビデのことを見ていきましょう。彼はバアナとレカブに対し、こう言いました。9節から11節。「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主は生きておられる。かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました』と告げて、自分自身では、良い知らせをもたらしたつもりでいた者を、私は捕らえて、ツイケラグで殺した。それが、その男の報いであった。まして、この悪者どもが、ひとりの正しい人を、その家の中の、しかも寝床の上で殺したときはなおのこと、今、わたしは彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除き去らないでおられようか。」

今回と同じような話が実は1章で起きていました。サウルが戦場で倒れたとき、サウルの頭にあった王冠と腕についていた腕輪もってダビデのところに走ってきた若者が

いました。ダビデは若者の嘘を見破り、厳しい処罰を下した事件です。今回の事件とよく似ていますが、よく見ると違うところがあります。前回は、若者がその場の思いつきでやった犯行です。ところが今回は用意周到、計画的な犯行です。最初からイシュ・ボシェテの首を狙うために屋敷に侵入し、相手が油断している所を襲っています。前回の事件に比べても悪どさがまったく違います。

2) 「ひとりの正しい人」

自己中心的な動機で計画的な犯行ですから、ダビデの下した判決は現代の私たちにも納得しやすいでしょう。しかしダビデがこんなふうに語っている箇所についてはどうでしょうか。11節前半です。「この悪者どもが、ひとりの正しい人を、(殺した。)」

ひとりの正しい人とは、イシュ・ボシェテのことです。なぜ正しい人と呼ばれるのか。ダビデがイスラエルの次の王となることは神の計画として定められていました。それなのに、イシュ・ボシェテは自分がイスラエルの王であると主張したのですから、神の計画を邪魔したことになる。ならば、当然厳しい処罰を受けるべきである。まして、「正しい人」と言われる資格はまったくない。そんな判断をしたくなります。ところが、意外なことにダビデはイシュ・ボシェテは「正しい人であった」と言うのです。

イシュ・ボシェテが何か良いことをしたというのなら理解できます。ところが、彼が素晴らしい信仰をもっていたと言うことは何も書いていません。死んでしまった人のことは悪く言わないという文化が日本にあります。どんな人でも死んでしまえば「仏」になり、ときには「神」にさえなることもありま

す。あまり悪く言えば、死んだ者に崇られるという思想があるのかもしれませんが。

もちろんダビデの場合はそういうことではない。ではどうして「正しい人」と呼ぶのでしょうか。

2) ヨナタンとの契約

きちんとした理由があります。最初に、この箇所を理解する鍵はヨナタンという人物にあると申しあげました。ヨナタンの父親は、ダビデを憎み殺そうとしていたサウルです。何とも皮肉なことですが、ヨナタンは父とまったく正反対で、ダビデの大的仲良しであり、同じ神を信じる信仰の友でもありました。聖書を読めば読むほど、ダビデヨナタンは双子の兄弟ではないかと思えるくらい、このふたりはそっくりです。ただ違うのは、イスラエルの次の王となるのはダビデであって、ヨナタンではない。そこが違う。ヨナタンはダビデが王となることを信じています。ダビデが王となるということは、自分が死ぬことを意味します。

自分が死ぬことを覚悟したヨナタンは、あるときダビデに次のように語ります。「もし、私が生きながらえておれば、主の恵みを私に施してください。たとい、私が死ぬようなことがあっても、あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。主がダビデの敵を地の面からひとり残らず断ち滅ぼすときも。」(第一サムエル 20 章 14, 15 節)

こう言って、ヨナタンはダビデの家と契約を結びます。ヨナタンが「あなたの恵みを私の家から断たないでください」と願ったところに注目してください。「私の家」とはサウルの家のことです。サウルの家に属する者全員に主の恵みを施してほしい。そう願ってい

ます。ダビデはこの約束を生涯死ぬまで忘れません。先取りしていえば、ダビデは後にヨナタンの息子であるメフィボシエテを自分のそばに呼び寄せ、面倒を見るのですが、そうしたのもこの約束があったからでした。

今日の箇所ではイシュ・ボシエテがダビデから「正しい人」と呼ばれる理由も同じです。イシュ・ボシエテが良いことをしたからとか、信仰者であったからではなく、ただヨナタンが生前にダビデと交わした契約があったから、それでダビデは無条件でイシュ・ボシエテを「正しい人」と呼んだ。それが真実です。

3 イエス・キリストによる救いの契約

1) たとえ敵であろうとも

このことは、私たちにたいへん大きな希望を与えることとなります。私たちは考えます。「神に救われるために、何か良いことをしなければならぬ。」「私は怠け者だから天国には入れないのではないか。」

今日の箇所に、どんな人が救われたと書いていましたか。神の計画に逆らっていたイシュ・ボシエテが「正しい人」と呼ばれ、救われていったのです。その理由はただ一つ。ヨナタンがダビデに対し、「あなたの恵みを私の家から断たないでください」と願い、契約を結んでいたから。

イエス・キリストの救いもこれとまったく同じです。神が私たちと結んでくださった救いの契約。その契約書に何が書かれているか。私は、まるで弁護士のように言います。まずこの契約書に明記されていること。契約を結んだ神は、この契約をどんなことがあっても守らなければならない。たとえ、神のひとり子がいのちを捨てることがあっても守らなければならない。そう書かれています。

では、もう一方の契約の当事者である人間に対しては、救われるためにどんな条件が必要なのか。あなたが救われるために、あなたが何かをした、あなたが何かをしなかった。そのような条件は一切書かれていない。よく見ると、神にとっては非常に不利で、私たちにとっては非常に有利な、きわめて不公平な内容の契約書です。そのような救いの契約を皆さんは結んでいます。これ以上心配することがなにかあるのでしょうか。

2) ひとりの信仰が家族を救う

そしてもう一つの希望を確認して終えたいと思います。家族の中で救われたのは私だけ。そういう人が沢山います。愛する家族のあの人この人がまだ救われていない。そういう人も沢山います。信仰を告白せずに亡くなってしまった愛する家族、あの人たちのことはどうなるのでしょうか。

今日の箇所から言えることがあります。私たちは、家族の中でヨナタンの役割を果たすことができます。誰が救われるのか、私たちが決めることはできません。すべて神の主権です。けれども祈ることはできる。「たとい、私が死ぬようなことがあっても、あなたの恵みをとこしえに私の家から断たないでください。」こんなふうに祈ることができる。これは何を意味するか。皆さんが救われたことによって、皆さんが多くの家族を救う可能性があります。まさかと思いませんか。聖書に何と書いていますか。もう一度言います。ダビデはサウルが倒れたとき、このサウルを信仰者ヨナタンとまったく変わらない扱いをして丁寧に葬りました。ダビデはイシュ・ボシエテが死んだとき、「正しい人」と呼んで、やはり丁寧に葬っていきます。

そうしますと、私たちが救われたことの恵みは私たちが想像している以上にはるかに大きい。はるかに広がりを持っていることとなります。けっしてあなたひとりだけが救われたのではない、愛する家族のために皆さんが代表して救われている、まだ見たことのない子孫のためにさえ救われたのかもしれない。

主が与えてくださった恵みに感謝いたします。